

令和6年兵庫県鉱工業指数の概要について

1 令和6年県内鉱工業生産の動向

～鉱工業生産指数 前年比 1.0%減～

令和6年（平均）の鉱工業生産指数は 96.9で、前年比1.0%減（令和5年同4.1%減）と2年連続で低下した。

これを四半期別にみると、1～3月期が前期比0.6%増、4～6月期が同1.8%減、7～9月期が同3.7%増、10～12月期が同1.0%減となっている。

鉱工業出荷指数は、96.7で前年比1.5%減（令和5年同4.0%減）と3年連続で低下した。

鉱工業在庫指数は、102.2で同1.5%増（同3.0%増）と2年連続上昇した。

図1 鉱工業指数の推移（令和2年=100）

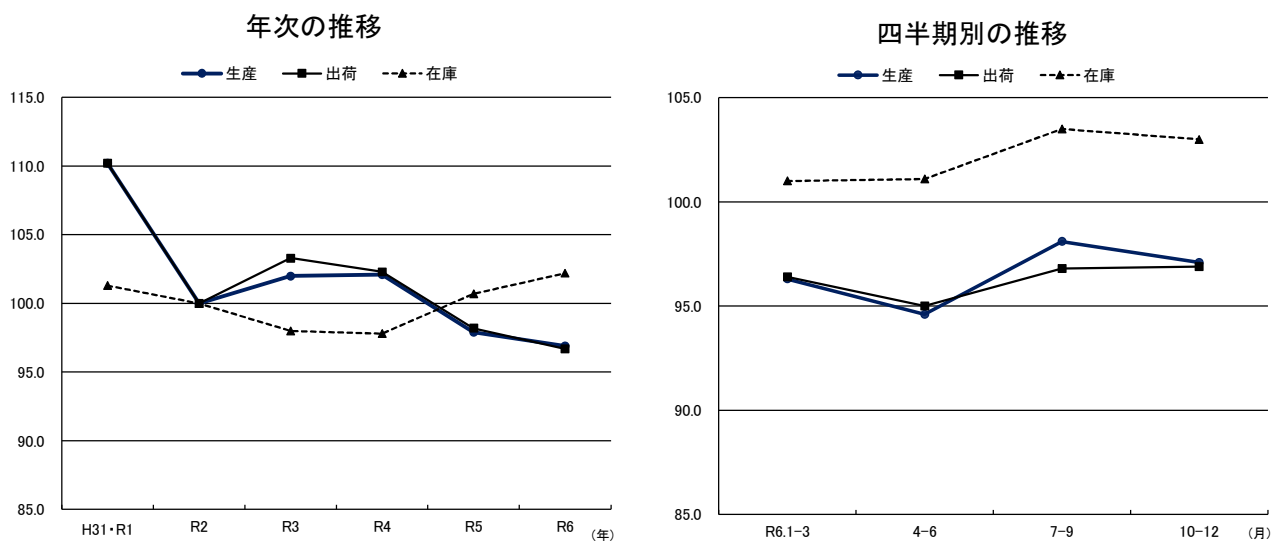


表1 鉱工業指数の動向

（令和2年=100）

	R5 平均	R6 平均	R5				R6			
			1-3月	4-6月	7-9月	10-12月	1-3月	4-6月	7-9月	10-12月
生産指数	97.9	96.9	99.8	99.2	96.2	95.7	96.3	94.6	98.1	97.1
対前期(年)比増減(%)	▲ 4.1	▲ 1.0	▲ 3.6	▲ 0.6	▲ 3.0	▲ 0.5	0.6	▲ 1.8	3.7	▲ 1.0
出荷指数	98.2	96.7	98.5	99.9	97.3	96.5	96.4	95.0	96.8	96.9
対前期(年)比増減(%)	▲ 4.0	▲ 1.5	▲ 5.2	1.4	▲ 2.6	▲ 0.8	▲ 0.1	▲ 1.5	1.9	0.1
在庫指数	100.7	102.2	100.4	101.2	100.4	100.9	101.0	101.1	103.5	103.0
対前期(年)比増減(%)	3.0	1.5	2.6	0.8	▲ 0.8	0.5	0.1	0.1	2.4	▲ 0.5

（注）年平均は原指数、四半期平均は季節調整済指数。

2 業種別鉱工業生産の動向

～17 業種中 7 業種上昇、10 業種低下～

令和6年の業種別生産動向をみると、全17業種のうちプラスチック製品工業、輸送機械工業、化学工業等の7業種で上昇したものの、情報通信機械工業、生産用機械工業、非鉄金属工業等の10業種で低下した。

対前年比でみれば、化学工業は前年比2.9%増（寄与度0.45）、輸送機械工業は同3.1%増（同0.29）、食料品工業は同2.3%増（同0.25）など、プラスに寄与した。

一方、情報通信機械工業は同25.3%減（同▲0.59）、生産用機械工業は7.3%減（同▲0.52）、汎用機械工業は4.3%減（同▲0.42）など、マイナスに寄与した。

表2 業種分類別鉱工業生産指数の推移

（令和2年=100）

	R5 平均	R6 平均	増減率(%) R6/R5	R5				R6			
				1-3月	4-6月	7-9月	10-12月	1-3月	4-6月	7-9月	10-12月
鉱工業	97.9	96.9	▲ 1.0	99.8	99.2	96.2	95.7	96.3	94.6	98.1	97.1
製造工業	97.9	96.9	▲ 1.0	99.8	99.2	96.2	95.7	96.3	94.6	98.1	97.1
鉄鋼業	105.8	105.6	▲ 0.2	107.7	106.6	105.9	102.8	106.3	103.4	105.8	106.8
非鉄金属工業	87.7	82.3	▲ 6.2	91.1	91.0	87.5	82.2	79.6	84.7	82.3	81.4
金属製品工業	90.4	86.6	▲ 4.2	97.7	92.4	87.4	84.5	86.2	86.3	85.1	87.7
汎用機械工業	85.3	81.6	▲ 4.3	86.0	95.5	75.0	77.3	84.3	74.0	83.1	80.6
生産用機械工業	99.3	92.1	▲ 7.3	115.3	105.3	88.9	86.3	87.4	88.6	101.3	91.6
業務用機械工業	101.8	100.0	▲ 1.8	98.8	111.8	97.2	100.2	99.8	92.1	100.1	107.4
電子部品・デバイス工業	74.0	69.5	▲ 6.1	76.9	71.6	72.8	75.4	63.9	70.0	70.7	72.3
電気機械工業	112.7	114.4	1.5	108.2	113.8	114.0	115.6	114.8	109.2	114.3	118.4
情報通信機械工業	75.0	56.0	▲ 25.3	76.7	73.9	73.8	74.0	59.9	57.4	53.2	52.6
輸送機械工業	105.7	109.0	3.1	102.0	99.8	107.4	112.4	114.4	109.4	105.9	104.9
窯業・土石製品工業	84.2	81.2	▲ 3.6	88.1	86.0	84.1	78.8	80.4	81.3	80.5	81.2
化学工業	106.6	109.7	2.9	105.5	105.7	108.6	106.4	107.7	107.2	111.1	111.3
プラスチック製品工業	93.8	96.8	3.2	95.3	94.5	93.9	92.3	91.1	97.1	98.9	99.0
パルプ・紙・紙加工品工業	99.7	100.3	0.6	101.1	99.1	99.4	99.9	98.3	99.2	101.2	101.2
食料品工業	96.5	98.7	2.3	97.4	97.2	96.4	95.6	97.5	98.8	98.1	99.4
その他の工業	97.6	96.6	▲ 1.0	98.1	99.1	97.5	95.9	94.1	94.8	98.3	98.0
鉱業	96.2	120.2	24.9	94.1	92.4	95.2	102.8	120.4	120.0	127.4	113.0

（注）年平均は原指数、四半期平均は季節調整指数。

表3 業種分類別鉱工業生産指数の寄与度（対前年）の推移

	生産 ウェイト	年平均指数(原指数 令和2年=100)					増減率(%) R6/R5	寄与度(対前年)				R6
		R2	R3	R4	R5	R6		R3	R4	R5	R6	順位
鉱工業	10000.0	100.0	102.0	102.1	97.9	96.9	▲ 1.0	2.00	0.10	▲ 4.11	▲ 1.02	—
製造工業	9998.3	100.0	102.0	102.1	97.9	96.9	▲ 1.0	2.00	0.10	▲ 4.11	▲ 1.02	—
鉄鋼業	852.8	100.0	119.9	110.7	105.8	105.6	▲ 0.2	1.70	▲ 0.77	▲ 0.41	▲ 0.02	8
非鉄金属工業	231.7	100.0	96.5	90.9	87.7	82.3	▲ 6.2	▲ 0.08	▲ 0.13	▲ 0.07	▲ 0.13	13
金属製品工業	722.1	100.0	98.6	105.9	90.4	86.6	▲ 4.2	▲ 0.10	0.52	▲ 1.10	▲ 0.28	14
汎用機械工業	1121.8	100.0	89.0	96.9	85.3	81.6	▲ 4.3	▲ 1.23	0.87	▲ 1.27	▲ 0.42	15
生産用機械工業	703.8	100.0	118.4	123.5	99.3	92.1	▲ 7.3	1.29	0.35	▲ 1.67	▲ 0.52	16
業務用機械工業	213.4	100.0	98.8	100.3	101.8	100.0	▲ 1.8	▲ 0.03	0.03	0.03	▲ 0.04	9
電子部品・デバイス工業	193.6	100.0	111.1	95.3	74.0	69.5	▲ 6.1	0.21	▲ 0.30	▲ 0.40	▲ 0.09	11
電気機械工業	817.1	100.0	93.2	92.3	112.7	114.4	1.5	▲ 0.56	▲ 0.07	1.63	0.14	4
情報通信機械工業	304.2	100.0	90.5	79.2	75.0	56.0	▲ 25.3	▲ 0.29	▲ 0.34	▲ 0.13	▲ 0.59	17
輸送機械工業	862.8	100.0	99.8	104.6	105.7	109.0	3.1	▲ 0.02	0.41	0.09	0.29	2
窯業・土石製品工業	277.8	100.0	100.6	98.2	84.2	81.2	▲ 3.6	0.02	▲ 0.07	▲ 0.38	▲ 0.09	11
化学工業	1420.7	100.0	105.1	104.8	106.6	109.7	2.9	0.72	▲ 0.04	0.25	0.45	1
プラスチック製品工業	364.5	100.0	104.8	100.0	93.8	96.8	3.2	0.17	▲ 0.17	▲ 0.22	0.11	5
パルプ・紙・紙加工品工業	231.8	100.0	103.2	103.6	99.7	100.3	0.6	0.07	0.01	▲ 0.09	0.01	6
食料品工業	1098.4	100.0	99.7	98.5	96.5	98.7	2.3	▲ 0.03	▲ 0.13	▲ 0.22	0.25	3
その他の工業	581.8	100.0	102.0	100.9	97.6	96.6	▲ 1.0	0.12	▲ 0.06	▲ 0.19	▲ 0.06	10
鉱業	1.7	100.0	126.9	126.7	96.2	120.2	24.9	0.00	0.00	▲ 0.01	0.00	7

3 特殊分類別（財別）鉱工業生産の動向

～最終需要財 前年比 0.9%減、生産財 同 1.0%減～

令和6年の特殊分類別生産動向を前年比でみると、家計や企業の消費する最終製品となる「最終需要財」は、対前年比 0.9%減（令和5年7.4%増）と2年連続低下し、中間製品として生産活動に再投入される「生産財」は、同 1.0%減（同1.4%減）と3年連続で低下した。

最終需要財の内訳を前年比でみると、設備投資となる「資本財」は同3.9%減、建設投資に向けられる「建設財」は同4.7%減、家電製品などの「耐久消費財」は同0.5%減、日用品、雑貨などの「非耐久消費財」は同 4.6%増となった。

表4 特殊分類別鉱工業生産指数の推移

（令和2年=100）

	R5 平均	R6 平均	増減率(%) R6/R5	R5				R6			
				1-3月	4-6月	7-9月	10-12月	1-3月	4-6月	7-9月	10-12月
鉱工業	97.9	96.9	▲ 1.0	99.8	99.2	96.2	95.7	96.3	94.6	98.1	97.1
最終需要財	95.8	94.9	▲ 0.9	99.5	98.1	91.7	92.6	94.5	91.2	94.7	96.9
投資財	91.2	87.4	▲ 4.2	96.6	95.4	84.3	85.6	87.9	82.2	87.8	88.8
資本財	91.4	87.8	▲ 3.9	96.8	96.8	82.9	84.7	89.8	80.6	88.7	88.4
建設財	90.6	86.3	▲ 4.7	95.2	93.7	88.6	85.7	81.9	86.5	85.7	89.9
消費財	103.7	107.7	3.9	103.9	103.1	104.1	103.8	105.9	106.0	106.9	110.1
耐久消費財	91.3	90.8	▲ 0.5	97.5	81.9	87.2	94.8	93.0	92.5	85.2	89.7
非耐久消費財	106.1	111.0	4.6	105.3	106.5	107.1	105.7	108.1	108.5	110.7	114.7
生産財	99.6	98.6	▲ 1.0	99.8	99.9	99.7	98.9	98.4	97.5	100.0	97.4
鉱工業用生産財	99.6	98.6	▲ 1.0	99.9	99.9	99.8	98.9	98.4	97.5	99.9	97.2
その他用生産財	99.1	99.9	0.8	96.5	100.8	99.1	100.0	98.9	96.9	102.6	100.3

（注）年平均は原指数、四半期平均は季節調整済指数。

表5 特殊分類別鉱工業生産指数の寄与度（対前年）の推移

	生産 ウェイト	年平均指数（原指数 令和2年=100）					増減率(%) R6/R5	寄与度（対前年）			
		R2	R3	R4	R5	R6		R3	R4	R5	R6
鉱工業	10000.0	100.0	102.0	102.1	97.9	96.9	▲ 1.0	2.00	0.10	▲ 4.11	▲ 1.02
最終需要財	4606.8	100.0	99.8	103.4	95.8	94.9	▲ 0.9	▲ 0.09	1.63	▲ 3.43	▲ 0.42
投資財	2897.9	100.0	98.0	102.4	91.2	87.4	▲ 4.2	▲ 0.58	1.25	▲ 3.18	▲ 1.12
資本財	2068.4	100.0	99.7	104.0	91.4	87.8	▲ 3.9	▲ 0.06	0.87	▲ 2.55	▲ 0.76
建設財	829.5	100.0	93.7	98.2	90.6	86.3	▲ 4.7	▲ 0.52	0.37	▲ 0.62	▲ 0.36
消費財	1708.9	100.0	102.8	105.2	103.7	107.7	3.9	0.48	0.40	▲ 0.25	0.70
耐久消費財	274.9	100.0	115.1	118.3	91.3	90.8	▲ 0.5	0.42	0.09	▲ 0.73	▲ 0.01
非耐久消費財	1434.0	100.0	100.4	102.6	106.1	111.0	4.6	0.06	0.31	0.49	0.72
生産財	5393.2	100.0	103.9	101.0	99.6	98.6	▲ 1.0	2.10	▲ 1.53	▲ 0.74	▲ 0.55
鉱工業用生産財	5180.7	100.0	104.0	101.0	99.6	98.6	▲ 1.0	2.07	▲ 1.52	▲ 0.71	▲ 0.53
その他用生産財	212.5	100.0	100.7	100.2	99.1	99.9	0.8	0.01	▲ 0.01	▲ 0.02	0.02

4 四半期別在庫循環の推移

在庫循環図は、縦軸に在庫の伸び、横軸に生産の伸びをとって各時点の状況をプロットした図である。在庫循環図では、景気動向の進展とともに、反時計回りにグラフが推移する傾向がある。一般的に右斜め上45°線より下にあるときは景気の回復期で、上にあるときは後退期と考えられる。

生産と在庫の推移をみると、令和2年第Ⅰ期に「在庫積み上がり局面」にあったが、2年第Ⅱ期から2期にわたり「在庫調整局面」となった。その後、2年第Ⅳ期から2期にわたり「意図せざる在庫減局面」を経て、3年第Ⅱ期から2期にわたり「在庫積み増し局面」、3年第Ⅳ期は「在庫積み上がり局面」、4年第Ⅰ期からは2期にわたり「在庫調整局面」となった。4年第Ⅲ期では「在庫積み増し局面」、4年第Ⅳ期では「意図せざる在庫減局面」、5年第Ⅰ期から2期にわたり「在庫積み上がり局面」、5年第Ⅲ期から4期にわたり「在庫調整局面」となった後、6年第Ⅲ期から2期にわたり「在庫積み上がり局面」へとシフトしている。

図2 四半期別在庫循環の推移（令和2年第Ⅰ期～令和5年第Ⅳ期）

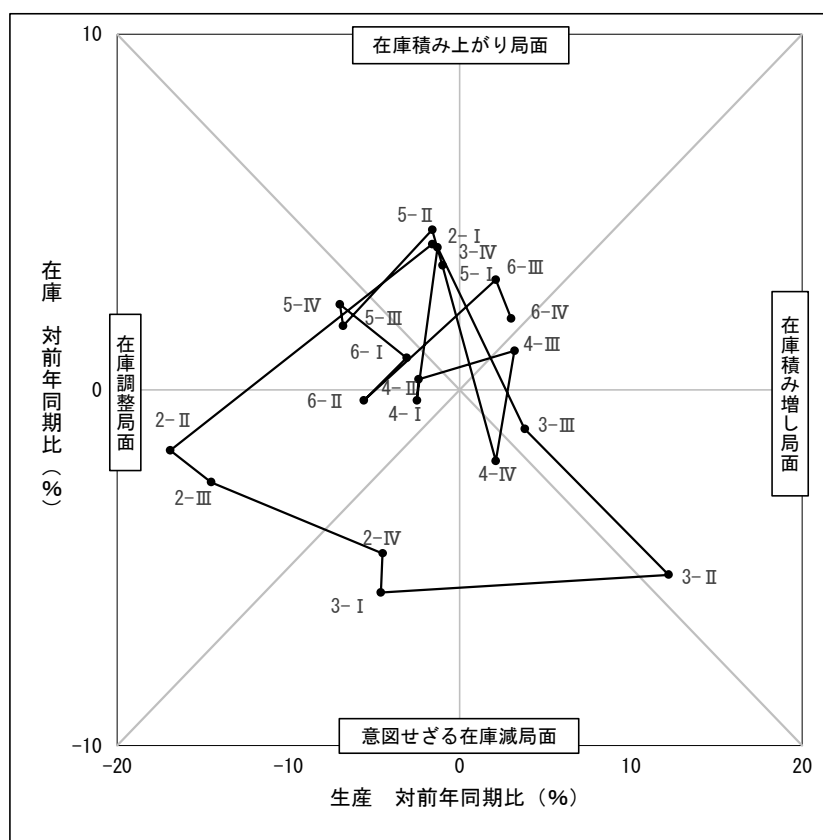


表6 在庫循環の4局面

局 面	内 容
意図せざる在庫減局面 (景気拡大初期)	生産が停滞気味であるが、需要の回復により出荷が増加し始め、在庫が減少する。
在庫積み増し局面 (景気拡大本格化)	需要が供給を超過すると、生産、出荷とも好調に推移し、減少していた在庫も積み増しされる。
在庫積み上がり局面 (景気後退初期)	供給が需要を超過すると、生産に比べ出荷が減少し始め、在庫が積みあがる。
在庫調整局面 (景気後退本格化)	供給過剰により、適正水準を超えた在庫を減少させるため、生産を抑え在庫調整を図る。

※ 兵庫県鉱工業指数の統計表は、以下のURLでも提供していますので御利用ください。

<https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk11/hyogoiip/index.html>